

●グローバル化時代の医療・検査事情 15

雲南の旅 その5
滄源(ツァンユェン) 2014年

いわもと あい きち
岩 本 愛 吉
Aikichi IWAMOTO

I. 香港

留学時（1984～1987年）のボス、タック・マック教授（カナダ・トロント大学）が2013年に来日した時、「来年7月末に香港に行く。香港で唯一の（本当？）ミシュラン一つ星レストランを予約した。1年前に予約しないと取れない所だ。食事と宿泊は面倒みてやるから来ないか？」と誘われた。2014年の雲南の旅は7月末からの予定だったから、香港経由で昆明に飛ぶ予定にすればバッチリのタイミングだった。7月29日に香港に飛んだ。香港出身のタックは、自分が主催したシンポジウムが終了した後、

小学校時代の友人や香港の共同研究者やシンポジウムの協力者達と食事会を開いていた。食事も美味しかったが、翌日ツアーが組まれた友人の別荘には驚いた。プールの向こう側に広大な湾が一望できた。差し詰め、プライベート・ビーチならぬ“プライベート湾付の御殿”だった（写真1, 2）。



写真1 香港のプール付別荘



図1 2014年滄源(勐董)への行程

★が宿泊した易門（7月31日）、双廊鎮（8月1日）、臨滄（2日）、滄源（勐董3日）、耿馬（4日）、弥渡（5日）、澄江（6日）。●は経由地。



写真2 別荘には、実は湾が一つついている？

Ⅱ. 玉溪市易門県龍泉鎮

7月31日、香港から昆明に飛んだ。雲南の雲にはしばしば魅せられるが、今回は“大きな口を開けて立ち上がったワニ”のような雲が出迎えてくれた(写真3)。

昆明(クンミン)長水(チャンスイ)国際空港では、李洪(リ・ホン)雲南CDC部長と広州から駆けつけた劉煥亮(リュウ・ファンリヤン)中山大学教授に加えて、2013年の瑞麗(ルイリ)への旅にも同行した雲南CDCの莫冷鶴(モー・ランフウ)さん、お嬢さんの王思璇(ワン・シシュアン)さんが待っていてくれた。これまた気心の知れた王治剛(ワン・ツーガン)さんの運転で、玉溪(イーシー)市易門(イーメン)県疾病預防控制中心(CDC)に向かった。中国の行政区分は大きいものから順に省、地、県、郷という4つのクラス(級)に分けられており、省級、地級、県級それぞれのクラスの市がある¹⁾。玉溪市は地級市(prefecture-level)で、易門県より大きな行政区分である²⁾。CDCのレベルも雲南CDC(province-level)、玉溪市CDC(Prefecture-level)、易門県CDC(county-level)と階層がある。上位の玉溪市CDCから、陳所長と高副所長が易門県CDCまで出向いてくれた(写真4)。易門県CDCは、易門県の中で最大の龍泉(ロンチュアン)鎮にある。易門県の人口は17万人、龍泉鎮は5万人というから、中国では人口密集地とは言えない。「感染症より高血圧や慢性疾患の方が問題」ということだった。易門県CDCを見学し、会食した後、龍泉鎮内にある龍泉国家森林公园を散策した(写真5)。洞窟に繋がっ



写真3 飛行機から見た雲南上空の雲



写真4 易門県CDCの門前にて

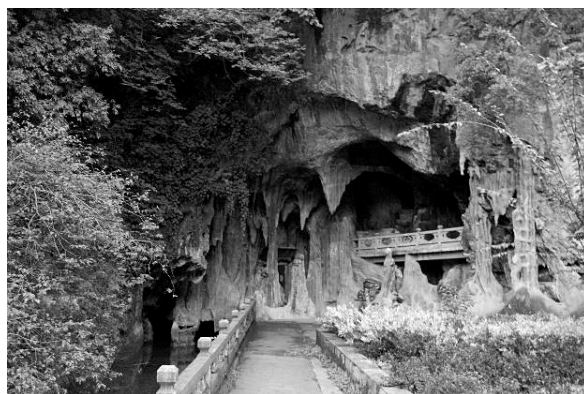


写真5 龍泉国家森林公园の洞窟

た細長い池の回りに遊歩道が整備され、住民の憩いの場所となっていた。「龍泉鎮は水が綺麗なことで有名で、住民の使う上水の水源はこの洞窟だ」とのことだが、夕方になると洞窟からコウモリが飛び出してきた。当然、排泄物がどこに落ちるかは気になる所だ。古くから飲料水として飲んでいるから大丈夫なんだろうが、個体数が多く、世代時間が短く、密集して生活するコウモリは多数のウイルスの自然宿主になっている。中には病原性の強いウイルスもある。少々心配になった。さらに暗くなると、ほのかな灯りを点したホタルが飛び回りだした。日本という平家ボタルのようだった。

Ⅲ. 大理市双廊鎮

8月1日午前8:30、龍泉鎮のホテルを出て高速道路を西へと走った。楚雄(ツーシオン)市、祥雲(シャンユン)県を通り雲南省で2番目に大きい湖、洱海(アーハイ)を過ぎたところで高速道路を降り、洱海西岸に沿って北上した^{3,4)}。湖の北端を東に回

り込んで双廊(シュアンラン)鎮へ到着した頃には、夕方になっていた。天候は曇りでやや風が強く、洱海はさざ波が立ってどんよりと沈んだ雰囲気だった(写真6)。小舟に乗った漁師もそろそろ仕事終いにかかっているようだった。湖畔の瀟洒な3階建てのホテルにチェックインした。リゾート感覚のフロントで、リラックスした様子の若い女性が出迎えてくれた。中国のホテルでいつも経験する事務的なチェックインとは一風異なっていた。筆者の部屋は最上階に用意してくれていた。エレベーターは無く、重いバゲージを3階まで運び上げるのが一苦労だったが、部屋はWi-Fi完備、シャワー室も小綺麗で、枕元のナイトテーブルにはコンドームが置いてあった。

双廊鎮は大理近郊に多い白族の古い漁村で、洱海湖畔に細長く張りつくように位置している。近年はペンション建築が盛んで、結婚式を挙げるためにやってくる若いカップルの人気スポットとなっている。少し休んでから湖畔のレストランに夕食に行った。霧雨が降る中、村の狭い路地を抜けて湖畔に向かった(写真7)。途中のレストランの玄関先に「釣魚島(ジャオユーダオ)」と彫った石が置いてあった。尖閣諸島のことだ。すぐ写真を撮ろうと思ったが、食事中の人達が傍にいたので断念して、皆を追った。以前雲南の片田舎で、ある人が筆者に言った、「中国と日本は海の方で何か揉めているようだが、ここは山奥だから関係ないよ」。わずか1~2年で雲南の小漁村まで日中問題が響いてきている。「写真を撮っておかないと、きっと後悔するだろう」と思い直し、「写真を撮りに戻ります」と李洪さんに伝えた。李洪さんが王さんに短く声をかけた。「先生につい

て行って安全を確認せよ」と指示したのだろう、王さんが追ってきた。戻って、無事「釣魚島の石」を写真に撮った(写真8)。

湖畔のレストランに着き、湖に面した席に陣取って注文を始めた時、岸辺で大きな歓声が上がった。店のご主人が大きな魚を釣り上げたいらしい。劉さんが釣り上げたばかりの魚を調理するよう注文した。レストランの食材は野菜以外、洱海の産物だ。焼き貝を口に運んでいると、隣のレストランから一人の女性が生ゴミ入りのバケツを運び出し、中身を洱海に向かってぶちまけた。思わず箸でつまんだ巻き貝を見つめた。

ホテル横の小さな湾ではアオコが大量に発生していた(写真9)。洱海の環境汚染は昆明の滇池(ディエンチー)より遙かにまじだが、湖畔では富栄養化が明らかだ。村興しで少数民族の古い漁村が活性化するのはうれしいが、巨大な人口と環境が長年折り合ってきた中国で、急速に悪化する環境汚染を見るのは辛い。環境対策の分野で日中協力が進むことを祈る。



写真7 双廊鎮の路地に佇むドライバーの王さん



写真6 夕暮れ時の洱海



写真8 釣魚島と彫った石



写真9 双廊鎮湖畔のホテル。
左手の白い建物が宿泊ホテル。

IV. 臨滄市

8月2日午前8:30に双廊鎮を出発した。高速道路を少し昆明方向に戻って、祥雲で降りた。そこから臨滄（リンツァン）市までは一般道だ。道すがら、骨付きの豚肉と思われる塊をたくさん吊したレストランに遭遇した（写真10）。生ハムを作っているらしい。一応舗装してあるとはいえ、道路脇ではこりまみれだ。李洪さんたちは、ここで昼食にすると決めた。鶏を骨ごとぶった切って煮込んだ定番料理と生ハム中心のランチだったが、いずれもなかなか美味だった（写真11）。

一般道をさらに走って、臨滄市に入った。臨滄市は215万人が住む地級市で、面積24,469km²。九州（36,750km²）の約2/3、四国（18,298km²）よりかなり大きい⁵⁾。臨滄市の中心は、臨翔（リンチャン）区と呼ばれる人口28万人の地方都市である。臨翔区では、まず臨滄市CDCを訪問し、呉（グオ）副



写真10 道ばたでハム製造中

所長とAIDS担当の李さんの案内で内部を見学した（写真12）。

ホテルにチェックインしたあと、近所のレストランで呉副所長、李さんと落ち合った。夕食には、臨滄市衛生局の陳さんもやってきた。

V. 臨滄市滄源

ホテルの部屋にはWi-Fiが無かった。雲南省の中でもこの地方は特色が少なく、発展が遅れているようだ。8月3日早朝に起きてホテルの本館ロビーに行ってみたが、やはりWi-Fiは使えなかった。今日の行程は短いので集合は遅く、午前9:50にホテルを出発し、一般道をさらに南下した。臨滄市の南部には少数民族自治区が3つあり、それぞれ耿馬（ガンマー）傣族佤族（ダイゾー・ウアゾー）自治県（耿馬県）、双江（シュアンチアン）拉祜族佤族布朗族傣族（ラーフゾー・ウアヅウ・プーランゾー・ダイゾー）自治県（双江県）、滄源（ツァンユェン）佤族自治县（滄源县）と呼ばれている。前日泊まった



写真11 ハムと鶏肉中心の昼食



写真12 臨滄市CDCと呉副所長

臨翔区から双江县に入った。東南側が普洱市に接しているだけあって、この辺りでもお茶の栽培が盛んだった。昼食に立ち寄ったレストランも茶畑を経営しており、大量の茶の葉を乾燥させていた（写真 13）。昼食は、鶏鍋と野菜を中心とした素朴な雲南料理で美味しかった（写真 14）。

佤族は、中国、ミャンマー北部とラオス北部の山間部に居住する少数民族である。中国の佤族 35 万人の約半数が臨滄市に住み、滄源県 12.5 万人、耿馬県 3.7 万人、双江县 1.2 万人と分布している⁶⁾。高床式住居に住み、男性は頭に黒いターバンを巻く。ウィキペディアによれば「近年まで首狩りの風習があった」。「えーっ、早く言ってよー!？」。

昼食後、双江县からミャンマー国境に面する滄源県に入った。8 年ほど前に入手した雲南省地図と 3 年前のものを比べると、滄源県の中心市街が滄源から勐董（モンドン）鎮に変わっている。当時の自分のノートを見返すと、自分がいるのが滄源か、勐董なのか、よくわかっていなかったようだ。雲南省の行政区の名称は今も変化し続けているようで、古い



写真 13 お茶の乾燥風景



写真 14 昼食風景

地図ほど大きな行政区（県）とその県の中心市街が同じ名前になっている例が多い。新しい地図では、大きな行政区とその中心の行政区の名前が異なる場合が増えている。昆明以外でも各地で人口集中化が起きているようだ。人口が増え市街区が大きくなるにつれ、地域全体の名称とそこにある市街区の名称が同じでは不便に違いない。活発な行政区分の見直しが行われているようだ。

VI. 滄源県勐省鎮和平

8 月 4 日、滄源県勐董鎮を出て、昨日南下した道に戻って勐省（モンシャン）鎮に入った。勐省鎮は人口 15,000 人の郡（township）で、郡内に 8 つの行政村（administration village）と 53 の自然村（nature village）がある（写真 15）。地域内にはサトウキビからの製糖などを主な事業とする勐省農場がある（写真 15 の▲印）。零細農家を中心としたこの地域で、勐省農場は住民約 7,000 人を雇用する経済の中心である。和平（フービン）は、勐省鎮の 8 行政村の 1 つで勐省農場と接しており、村内 5 つの自然村に合計 2,500 人が住んでいる。このあたりで近年 HIV 感染者が急増しているということが、李洪さんがこの地を 2014 年の訪問地を選んだ理由だった。

和平村 CDC の担当者と会合を持ち、HIV の流行情報を聞いた（写真 16, 17）。臨滄市で初めて HIV

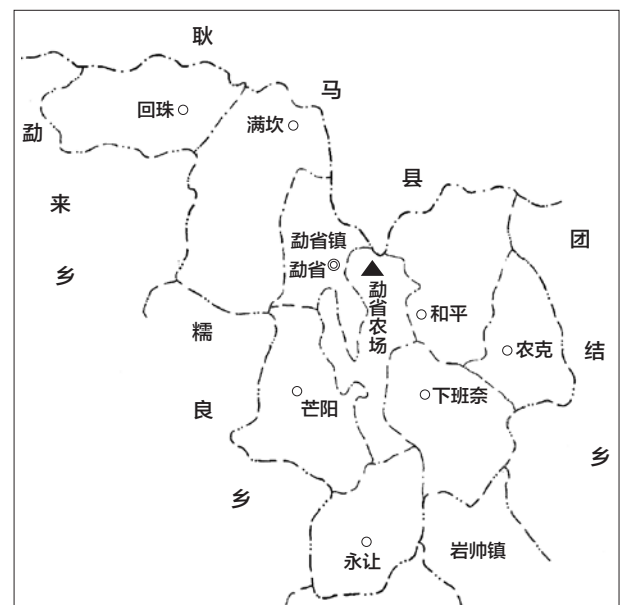


写真 15 滄源県勐省鎮平面図。「勐省农场」は「勐省農場」の中国表記。



写真 16 和平 CDC のスタッフと



写真 17 和平 CDC スタッフとのディスカッション

感染者が報告されたのはミャンマー国境の勐董鎮で、1996 年のことだった。勐省鎮の第 1 例目は 2001 年、和平で男性の経静脈的薬物使用者 (intravenous drug user : IDU) だったという。その後、2001～2013 年の間に勐省鎮で 431 人 (男性 245 人、女性 186 人) の HIV 感染者が報告され、その内 50% 以上 (235 人) が勐省農場 (126 人) と和平 (109 人) に集中している。人口あたりの報告数は、人口わずか 2,500 人の和平が最も多い。感染経路別に和平の感染者を見ると、約 30% が IDU、残り約 70% が性感染だという (表 1)。既婚者の感染が約 70% と大部分を占め、うち半分 (26 組) が夫婦ともに感染しているが、すべて IDU の夫が先行感染し、妻に 2 次感染したようである。残りの半分 (24 組) は、片一方のみが感染した所謂 sero-discordant couple で、その 1/3 (8 組) が妻のみの感染である。IDU の大部分は男だというから、sero-discordant couple の妻の中には、婚外男性との性行為による感染もあるらしい。109 人のうち 11 人が既に死亡 (10%) し、98 人 (90%) が 2014 年の時点で生存中である。生存している 98 人のうち男性 68 人 (69.4%)、女性 30 人 (30.6%) と男性に多い。

表 1 和平村の HIV 感染者 109 人の内訳

感染経路	経静脈的薬物使用	34 (31.2%)	
	性感染	75 (68.8%)	
婚姻状態	既婚	76 (69.7%)	
	未婚	28 (25.7%)	
	離婚	5 (4.6%)	
婚姻 50 組における配偶者の感染状況	双方が感染	26 組	52 人
	一方が感染	24 組	24 人
一方感染 24 組の性差	男が感染	16 組	16 人
	女が感染	8 組	8 人

治療を受けているのは 78 人 (79.6%) で、未治療は 20 人 (20.4%) である。治療は勐董鎮の病院まで通って行っているらしい。2011 年以降は、結婚する際に性感染症のチェックをしているらしいが、HIV のみのスクリーニングだという。2012 年以降は、妊婦健診で HIV 以外に梅毒や HBV も調べているが、今回のデータのもとになった住民調査は HIV だけで、他の性感染症は調査されていない。

感染者の約 50% が 20 歳代、約 30% が 30 歳代で、この地域の 20 歳代の青年の 10% 以上が HIV 陽性だという。1990 年代はじめ、HIV 感染者が急増した北タイの状況に近い。雲南、中でも南西部のこの地域は、かつての世界的ケシ栽培地、ゴールデン・トライアングルに近い。HIV 流行の主たる感染経路も、経時的に IDU→異性間性感染→男性間性感染と変化してきたという説明を受けてきたし、そのように理解してきた。今回示された和平 109 人の感染経路で、IDU は約 30% (34 人) にすぎない (表 1)。雲南における HIV の感染経路として、薬物使用の重要性が減少したのだろうか？ 恐らくそうではなかろう。婚姻関係にある双方が感染している 26 組では、夫が IDU でプライマリーの感染者、妻は夫婦間の異性間性行為によって HIV 感染した可能性が高い。そうだとすると、妻の感染は夫の薬物使用による感染がなければ起こらなかった可能性が高い。妻へのケアは無論重要だが、この地域の感染対策はやはり「薬物使用」中心にあるべきだということだろう。

婚姻関係の一方の女性が感染した例が結構あることを考えると、この地域における異性間性交渉による HIV 流行の疫学にも少々興味が湧いた。西日本の一部では、かつて地域的な異性間性交渉の風習があったということを、若い頃に聞いたことがある⁷⁾。食材も似ている雲南と日本では (コンニャク、里芋、餅米など)、民間の性風習も似た面があったのかと

興味もそそられたが、確認できていない。

猛省鎮で和平 CDC のスタッフ達と昼食をとった後(写真 18)、耿馬鎮の中心、耿馬鎮へ向かい、耿馬県石佛洞 CDC のスタッフから説明を聞いた(写真 19)。耿馬鎮近隣の石佛洞(シーファドン)や弄巴村(ノンバーツン)でも、和平と状況はほとんど変わらない。感染の中心は 20-30 歳代の佧族で、感染者の約 80% は小学校しか出ていない農夫で、約 8% が非識字者だという。村にかかりつけ医はいるが、治療薬は 25km 離れた病院まで行かねばならない。服薬遵守は容易ではなかろう。

広大な中国でも、この辺りは最も未開拓の山間部～農村部の一つといっても過言ではないだろう。教育機会は極めて限られており、小集落での貧しい暮らしから抜け出すのはほぼ不可能だと思える。近年急速に経済発展した中国の巨大な富が、雲南のこの山奥まで届くのはいつになるのだろうか？

日本では識字率も高く、2010 年の高校進学率も 98% を達成している⁸⁾。今の日本では、地域的な規模で極度の教育不全があるとは思えないし、それに



写真 18 猛省鎮での質素で美味しい昼食



写真 19 耿馬傣族佧族自治县石佛洞 CDC

よる感染症の蔓延も想像しにくい。果たして将来もそうだろうか？

「鉄道も廃止となり、地元これといった産業のない地域に、普通免許の筆記試験に合格できる程度の読解力を身につけずに卒業する子たちが大勢いる」、「東ロボくん」という AI (automatic intelligence) が東大入試に合格できるか、というプロジェクトを行った新井紀子教授の著書の一節である⁹⁾。東ロボくんの勉強をもとにリーディングスキルテスト(RST)を開発し、25,000 人を超える全国の中学高校生を対象に RST を行い、決定的な読解力不足が蔓延している日本の現状をデータで示している。日本の近未来も楽観できなさそうだ。

Ⅶ. 澄江リゾート

この広い中国で、標準時間は北京時間ただ一つである。雲南は中国の南西端、臨滄市は雲南省の最南西に位置する。当然のことながら、夜の明ける時刻は遅い。午前 6:30 頃になって辺りが白んでくる。雄鶏の鳴き出すのは午前 7:00 頃である。8 月 5 日、耿馬鎮を出て北上した。至る所で土地さえあれば、サトウキビやトウモロコシが植えられている。その間を縫うように一般道を運転するドライバーは大変である。幸福(シインフー)鎮という所でランチ休憩を取った。山岳地帯だからどこに温泉があっても不思議ではない。温泉卵やしばしの足湯を楽しんだ(写真 20, 21)。南汀河(ナンティンフー)を遙かに見下ろしながら、この日は約 300km 走って、祥雲に近い大理州弥渡(ミドゥー)県的美晨(メイチェン)ホテルに泊まった(図 1)。



写真 20 幸福鎮で温泉卵を掲げる李さんと劉さん



写真 21 幸福鎮でしばし足湯を楽しむ
ドライバーの王さん

8月6日午前8:30、弥渡を出て高速に乗って東に進み、昆明手前でランチ休憩となった。8月、特に上旬の雲南と言えば茸の季節であるが、雲南のどこにでも豊富にあるというわけではない。この時期には、土地土地で珍しい茸はあるが、種類や収穫量か



写真 22 道路脇のレストランの茸棚



写真 23 澄江 CDC 入り口

ら言って、楚雄市を中心に昆明のやや西から祥雲辺りまでが茸王国、というところだろうか(写真 22)。昼食後、昆明を通り過ぎ、澄江(チョンチャン)県澄江 CDC を訪問した(写真 23)。宿泊は、抚仙湖(フーチェンフー)湖畔の大きなリゾートホテルで、重慶その他から、夏休み中の家族連れが多数の大型バスを連ねて泊まりに来ていた(写真 24)。

8月7日、抚仙湖湖畔のリゾートから昆明空港に直行した。7月31日からの約一週間で、走行距離は2,025km。やはり王さんは素晴らしいドライバーだ。李さん、莫さんとお嬢さん、王さんに別れを告げ、劉さんと二人、広州へ飛んだ。広州では汪建平中山大学副学長・中山大学第六病院長が待っていてくれた。この日の美酒は茅台(マオタイ)で、なんと非売品のマークがあった(写真 25)。しかし、何と言っても中国である。蓋にはきちんと汪先生の名前が刻されていた。



写真 24 ホテルから見下ろした抚仙湖



写真 25 茅台(非売品)

文 献

- 1) 岩本愛吉。「雲南の旅 その1 なぜ雲南か?」。モダンメディア **63**(2): 22-25, 2017。
- 2) 玉溪市。ウィキペディア。2018年2月3日閲覧。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/玉溪市>。
- 3) 岩本愛吉。「雲南の旅 その2 シャングリラ(香格里拉)_2010年」。モダンメディア **63**(5): 21-27, 2017。
- 4) 岩本愛吉。「雲南の旅 その4 瑞麗(レイリ)_2013年」。モダンメディア **63**(11): 19-26, 2017。
- 5) 臨滄市。ウィキペディア。2018年2月3日閲覧。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/臨滄市>。
- 6) ワ族。ウィキペディア。2018年5月1日閲覧。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ワ族>。
- 7) 赤松啓介。「夜這いの民俗学・夜這いの性愛論」。ちくま学芸文庫。2004年。
- 8) 文部科学省。「高等学校教育の現状」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/09/27/1299178_01.pdf
- 9) 新井紀子。「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」。東洋経済新報社。